

バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第133号 [2016年3月]

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

+...+

主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第133号をお送りします。今月の集会は、日本より鈴木伸治牧師にネットを利用しての礼拝メッセージをお取次ぎいただきました。こちらに要約をご紹介します。

「キリストの平和をいただきながら」

ヨハネによる福音書 16章25-33節

キリスト教の今年の暦では、3月20日から受難週に入りました。1週間、様々な事柄があり、今週の金曜日には十字架につけられ、死んで葬られることとなります。主イエス・キリストが私達をお救いになるために十字架への道を踏みしめて行く、重く悲しい結末に向かう1週間です。まさにイエス様を信じる者に取っては悲しみの一週間です。私はキリスト教に導かれて以来、この受難週の間は好物を断つという形で克己の生活を送り、イエス様のご受難に与る姿勢を導かれながら過ごしてきました。しかし、5年前になってその姿勢が変えられたのです。

2011年4月4日から5月18日まで、私はバルセロナに滞在してカトリック教会の棕櫚の主日の迎え方を示され、なんとなく目が覚めたような思いになりました。その教会の受難週ミサでは、棕櫚の聖日礼拝で子どもたちが棕櫚の枝をもってまず教会の庭に集まります。一通りのお祈りの儀式が終わると、一同で教会の中に入って行き、神父さんと共に聖壇に上がります。そして、いよいよイエス様が都エルサレムに入られたとき人々が歓呼してイエス様をお迎えしたように、子ども達は棕櫚の枝を聖壇の床に打ち鳴らし、喜びつつイエス様をお迎えするのです。

このミサを経験するまでは、私にとって受難週と言えばイエス様のご受難に与る重く悲しい歩みでしたが、カトリック教会では棕櫚の主日から始まる受難週は、喜びの日であるという認識へと導かれたのです。すなわち、主イエス・キリストが十字架にお架りになるご受難への道は人間をお救いになることなのであり、この救いに与っている者として、これは大きな喜びであるのです。以来、受難週を私は喜びつつ歩むようになりました。



ヨハネによる福音書では14章から16章にかけて、イエス様が十字架にお架りになる前に、弟子たちに神様の御心を教えられたことが記されています。13章で「この世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り」弟子たちの足を洗ったイエス様は、ご自分が主イエス・キリストとして神から遣わされたこと、これからご自分が裏切られることで、この世をお救いになることを話しているため、決別説教とも言われています。お話しが終わると長いお祈りをささげ、その後捕えられて十字架への道を歩まれるのであります。

ここで繰り返しイエス様が示されていることは、「喜びが与えられる」ということです。16章16節からの段落は「悲しみが喜びに変わる」と題され、20節には「あなたがたは悲しむが、その悲しきは喜びに変わる」と示され、16章の終わりは「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」と結んでいるのです。十字架への道は救いの完成であり、イエス様は勝利者となられたのです。そしてイエス様の十字架への道は、主を信じる私達をも勝利者へと導きくださっているのです。この受難週はイエス様のご受難を偲ぶことですが、受難の先にある十字架が私達の救いの原点になるのですから、自ずと喜びへと導かれてくるのです。そしてこの十字架を仰ぎ見る人生が「キリストの平和をいただく」ことになるのです。

鈴木 伸治 牧師